『教育研究』41 (1999) pp.147－170
Educational Studies, 41 (1999) pp.147－170
International Christian University

農耕者と漁撈者の比較心理(2)
――神祭祀を通しての信仰心――

服部　純子

背景・目的

四季折々の自然の変化と農民・漁民の生業は深く関わっており、今回は、その生業と関わる神祭祀の根底に流れる信仰心をみていきたい。また、人生儀礼のうち、とくに産育と葬送については、霊魂の問題と深くかかわっているので、忌み観・不浄観および俗信についてみていく。本研究においては、文化とパーソナリティの観点から、各々の信仰態度・霊魂観と農民・漁民のパーソナリティを考察していくことを目的とする。

農耕儀礼としての田の神祭りは、季節の推移にそって稲作過程の折り目ごとに行われる。年頭の予祝に始まって、苗代の水口祭り・田植祭り・病虫害や風害を封ずるための呪的行為、収穫祭と一連の儀礼が続く。農民の生業の信仰の中で基軸となっているのが田の神であり、神を迎え、丁重に祀り、送るというのが神祭りの古い形態であり、稲作の儀礼には、その田の神の去来が、田から家・家から田へ、山から家へ・家から山へ、随時去来型、滞在去来型という特徴がある。春先に田に出て秋に山に戻る、冬に家・納戸に籠り春に田に出るという考え方を滞在去来型とすれば、播種や田植え時などその時々に、神の来臨を求めて稲の成育を願おうとするのは随時去来型といえる。

漁民にとり、船霊様、竜宮様、恵比寿様は漁業儀礼として生業と密着して

おり、大漁・不漁を左右すると信じられているので漁民信仰に不可欠な存在である。海原が生産の場であり、天候の移り変わりで漁獲高が左右され、船底一枚地獄という危険をはらんでいるために、農民と比べても神への祀りの頻度・度合いが違う。また、氏神様への帰依は多大なものがうかがわれる。

このような両者の異なる生業形態と信仰する神への対象の違う背景を前提に、両者の信仰心の相違をみていきたい。

前論文では、農民と漁民の信仰態度の特徴が明らかとなるよう年中行事を基軸に、霊魂観、鎮魂・禊祓、物忌みといった角度から考察してきた。

方法

農民の農耕儀礼の基軸となる田の神・農神を中心に、農民の信仰対象となる他の神・神霊および生業と密接な関係のある代表的な祭り事・呪的行為、そして俗信の生死への忌み・死霊観を、文献・事例研究に基ずいて抽出し、農民の信仰する対象に対する態度とパーソナリティを考察していく。

漁民の漁業儀礼と関わる船霊様、竜宮様、恵比須様、氏神様を基本に、他の神・神霊および生業と密接な関係のある祭り事、そして俗信の生死への忌み・死霊観を、文献・事例研究に基ずいて抽出し、漁民の信仰する対象に対する態度とパーソナリティを考察していく。

その際に用いた文献･事例に関しては、民俗信仰辞典（1987)、日本民俗地図Ⅰ、Ⅱ（1969,1971)、桜田勝徳（1978)、各地の生業（1981）である。

また、結果の記述に関しては、なるべく農耕者および漁業者の信仰態度の構造がうきぼりにされるように、説明的な記載とした。

結果

(Ⅰ)農耕者の信仰

(1) 田の神・農神信仰

(各地で田の神儀式形態は種々あり、現在は耕作機等により農耕儀礼は省かれたが、信仰儀式の大筋は以下のようになる。)

(a) 水口(みなくち)祭り

種籾撒き際し、苗代に田の神・農神の来臨を仰ぐ祭り。苗代の水口に木の枝を立て田の神の依代とし、焼米・洗米なども供えるのが、一般的な方法である。木の枝は、粥占に用いられたヌルデ等を用いる所があり、焼米を供えるのは田の神への供饌ではあるが、同時に鳥に食ませることによって神意を伺い豊凶を占おうとする。

(b) サオリ・サノボリ

田植え初めに田の神迎え・サオリを行う。早乙女は、田植え前の夜に物忌みをし田の神・男性を迎える。苗代の苗を三把、床の間などの祭壇に供える。早乙女中心の田植え終了後、田の神送り・サノボリでは、苗を田からとってきて荒神や竈神に酒食と共に供え、祝宴が催される。

(c) 初穂・刈初め

刈入れに先立ってわずかの初穂をとって神前に掛け、新米の焼米を供えて祀る。これは神霊の宿る聖なる収穫物を、神に捧げる感謝儀礼である。

(d) 亥の子・刈上げ

旧暦十月亥の日の刈上げの祭りで、刈り終わった後に行われ、農神・亥の子がこの日田から去るという。刈上げ後、子供が藁ボテや丸石で土地をたたき、悪霊を祓い、大地の精霊の活力を高め生産力を増やそうとする。十日夜(トウカンヤ)やお九日(オクンチ)の行事も同様に田の神を送る祭りである。

十日夜の田の神祀り日は、田の神が里から山へ帰る日であるという。

（e）アエノコト

旧十一月五日（新暦十二月五日）の能登地方の田の神迎え、民間の新嘗祭、餐(あえ)の事(こと)ことである。朝主人が山で採った若松・榊を床の間か神棚の下の種籾俵に立て、夕方田から男女二神の田の神を迎え、風呂に案内し二股大根や甘酒・赤飯等でもてなし、種籾俵に依りついてもらう。一月五日、九日（二月五日、九日）、田に送る。田の神は俵に依りついたまま蔵や納戸に籠るので穀霊ともみなされる。

（f）山の神

農民の信仰する山の神は、毎年里とを往復し、春里に降臨し田の神となって稲の成育をつかさどり、秋仕舞いがすむと山に帰るので、作神ともいう。

（2）客人神(まろうどかみ)・異神

（a）霜月祭り

民間の新嘗祭で、刈上げ後の神祭りで、物忌みを二月ころの農事始めの祭り頃まで行う。霜月二十三日夜から四日にかけて大師様・客人(まろうど)神(かみ)が訪れると信じ、各家は小豆粥や大根を供えて丁重にもてなし祀る。二十三日夜、ダイシコ吹きなどといって必ず吹雪があると伝えられており、神来臨の日とされる。

（b）事八日

十二月八日と二月八日を事八日と呼ぶ。農事が終了して次の農事までの冬の物忌み期間であり神祀りである。この日は夕方早くから家で忌み籠りしなければならない。一つ目小僧が訪れるといい、神の依代とされる目数の多い籠や笊を門口に高く揚げたり、臭気の強いニンニク・髪の毛を燃やして退散させようとする。この頃訪ねてくる異神をミカワリ婆さんと呼ぶ所もある。

(3) 祀り神

(a) 庚申講・日待ち

日待ちは庚申の日だけではないが、特に農民は庚申を大事にしており、年六回か二回、夜籠り日の出を拝み神に待坐する。沐浴し精進潔斎して神を祀る。庚申の日には禁忌事項が多い。同衾を忌み、食べ物も肉類やニラ・ネギ等は避け精進の必要性をとく。

(b) 竈神

竈やイロリなど家の火所に祀られる火の神である。荒神とも呼ばれ、火の神である竈神は、農作の神でもあり、田植え・サナボリ時に荒神と共に苗を供えられる。竈は住居空間では表や座敷とは対照的に、家の裏・陰の部分を支えている家の神で、他界とこの世の境界を媒介する。

(c) 荒神

荒神は火の神・竈神として祀られ、激しい性格の祟りやすい神で霊力が強い。田植え後と収穫後に荒神籠りをするところがある。荒神は祭祀を怠ると荒れる一方、農神・作神にもなる。

(4) 水の神・禊祓

(a) 大祓

六月・十二月の晦日に罪禍・災厄を祓う神事で、紙人形に罪禍を付着させて流す。大祓は一年を二分し、新しい区切りに入るための忌み日という。民間では六月の晦日を夏越(なごし)の祓と呼び、神社に設けられた茅の輪を、罪穢れが祓われて長生きを祈願しながらくぐる。

(b) 川祭り・水神

旧暦六月および十二月一日に行われる、禊祓を行う聖域としての水辺に近ずくことを禁じた水神の祭りで、立ち入れば水難にあうと信じられている。とくに六月は一年の後半期に入る前の大きな改まりの時

期で、物忌み禊祓が行われ、半年後の十二月も正月前の斎月とされる。また十五日前後、祇園信仰と結びついた水神祭りを行う所は多い。

(5) 呪的行為

(a) 虫送り

害虫・災厄をもたらすとされる疫病神を藁人形に封じこめ、鉦・太鼓で囃しながら村境や海川に送り出す共同祈願で、特に春から秋に行なわれる神送り行事である。災厄の託された人形が村境にたてられ、村への邪悪なものの侵入を防ぐ神に転じた例も見られ、御霊信仰と共通の側面を示している。

(b) 風祭り

農作物を風害から防除する共同祈願で、とくに稲の収穫を控え、台風の被害が憂慮される八朔や二百十日頃の秋口に風祭りを行う。虫送り行事と類似しており、藁人形を辻や村境に捨ててきたり海に流したり、風害だけでなく虫害や感冒なども送り流そうとする。

(c) 雨乞い

降雨を願う共同祈願である。松明で行列し村境まで赴くのは、虫追い・風祭りの儀式と類似している。唄や踊り雷鳴のような鉦や太鼓の音によって降雨を期待したり、神聖な池や水源池からの水を神社や池に撒き神社で籠り祈願したり、千把焚きといい、山上に藁などを積んで火を焚いたりして祈る。

(6) 俗信

(a) 産の忌

産の場所・特に初産の場合は、嫁の実家の納屋・オクの部屋が使われるのが一般的であるが、漁村ほどは別小屋にはこだわない。妊婦は、血を荒らすのでほうれん草やみかん、四つ足の動物の肉を食べることは禁じられていて、食べ物は制限された。産婦とその家族は、穢れて

いるとされ、二十一あるいは七十五日間は神仏を拝むことはできない。

（b）死の忌

四十九日間あるいは百日が終わるまで魂が家の周りから離れないといわれ、また、百日がすむまでは、お宮参りや正月の祝い、その他の祝い事は一切しない。また死体に触れると生まれてくる子が死ぬ、あるいは妊婦が葬儀の場に出たりすると、産まれる子供にあざが出るといわれ、妊婦が葬式に関係してはいけないという。

（c）死霊

烏泣きが悪いと誰かが死ぬといわれ、実際に亡くなることが多い。夜中に雨戸がガタンと大きな音を立てたりすると、人が亡くなっており、あの時別れにきてくれたという。あるいは誰も来ないのに、戸をたたく音がすると生家へ魂が来たのだという。

考察

（Ⅰ）農耕者の信仰とパーソナリティ

（1）田の神信仰に対する態度

水口祭りの場合、苗代に種籾を撒く際に、水口に木の枝を田の神の依代として立てるので、その時に降臨する田の神は苗の成長を見守る随時去来型といえる。また、木の枝は粥占のヌルデ等を用いる所があるところや焼米で豊凶占うところより、予祝要素が含まれており、種籾の播種段階で豊饒を祈願していることがうかがわれる。水口の依代に、初穂を用いて稲穂のようなものを大隅地方等で作る例（注1）があるように、稲魂の継承が考えられる。稲魂が新たに活力をつけ再生化をはかるために、アエノコトで示されるように、忌み籠りを重視しているように思われる。この再生観は同様に前回の研究（注2）でもみられた。この初穂は、神に感謝し捧げた初めての稲で、その

前提には神から恵授された、その神霊の宿る聖なる稲籾を水口にたて、その稲魂を次の苗・稲魂につなげていく農民の強い継承観がみられる。

田植えでは、田植え初めに田の神は来臨され、田植え終了後去られるので、田植え前後の田の神去来型である。田植え前に早乙女が物忌みして夜田の神・男性を迎えるところから、苗・稲の成長を願うのに、この段階であらためて男女神のからみを前提としているようである。田植え後の収穫まで稲の生育に関し、早乙女という神聖な存在が要請されるのは、稲の成長は新しい生命の誕生だからだろう。収穫祭・亥の子等の刈上げ祭りでは、農神・亥の子が田から去る日とされ、十日夜では、田の神が山へ帰る日という。田から山への田の神去来型といえ、田の神が山の神になる多重性がみられる。

アエノコトでは、田の神を霜月に田から家に迎え、種籾俵に依りついてもらい、二カ月ほど、農事始めまで、納戸・蔵で籠ってもらい家から田へ送るので、田から家へまた田へという、田の神滞在去来型がみられる。穀霊であるとされる田の神が夫婦なのは男女のからみが前提とされるからだろう。種籾が春に苗代田にまかれるまでの忌み籠りの間に、穀霊の田の神が種籾の稲魂に霊力をつけ活性化させ、春苗代に撒かれるのに備えての再生化が図られているように思う。

山の神はその結果にみられるように、春里に降りて来て田の神になり、秋に里を去って山の神霊になるという、山から田へまた山へという、田の神去来型であり、山の神と田の神の重複がみられる。上述の随時去来、田植え前後去来、田から家へまた田へという去来を含めて明らかなように、途切れることのなく、常時見守る田の神・神霊の存在が察せられる。ここには、農民の連続志向性および多重構造性がみられる。

注１：桜井徳太郎編、民俗信仰辞典、東京堂出版、1987

注２：服部純子、1998、農耕者と漁労者の比較心理（１）――年中行事を通しての信仰心――、教育研究40

（2）神霊・異神および種々の神さまに対する態度

霜月祭り、事八日もいずれもほぼ時同じくする忌み籠り期間であり、その各々の忌み日に、貴人と妖怪が現れるが、前者の神霊は丁寧にもてなし祀り、またこの日には神来臨の日としてふさわしい吹雪があるとし、後者には、その悪霊の侵入を防ぎ退散させるべく工夫がみられる。前者の客人神からは福を受ける祝福的な性格がみられ、後者の疫病神からは生活を脅かす種々の災厄・悪霊を除災する性格がみられる。

精進潔斎は庚申の日だけでなく、古来から、神を祀る場合には要求されたが、その中でも農民が信仰する神様のなかでは庚申の禁忌は最も厳しく、自らについた日々の垢・穢れというべきものを、年に何回か厳しい精進潔斎の日を設けて祓おうとする姿勢がみられる。

田植え・サナボリ時に苗を竈神と共に荒神に供えるのは、両者ともに農作の神と信仰されており、また竈神と荒神はいずれも共通した火の神である。とくに怒り祟りやすい神である荒神の方を、田植え後と収穫後という農民で最も忙しい時期に、荒神籠りをしてまで祭祀をとり行い、作神としての霊力にゆだねているところがみられる。また、竈は家の神で、あの世との媒介する神として結果に指摘されているところより、苗を供えることは家の祖霊にも、稲の成長の見守りを神頼みしていることがうかがわれる。

疫病や災害、雨不足は悪霊がもたらすことを前提に村境まで疫神送りする行事が、虫送り・風祭り・雨乞いのいずれにもみられる。それらの悪霊を特に藁人形に付着させて悪霊を排除・除去したりすることから、除災的性格がみられるが、逆に村外からの邪悪なものを防ぐ神に転じた例もあることから、疫病送りには善なるものをもたらすというので、祝福的性格もみられるといえる。

(3) 水の神・祓禊に対する態度

六月と十二月に大祓がなされるのは、一年を二分し新らしい区切りのために罪穢を祓うためとすると、同時期に行われる川祭り・水神祭りの方は、禊を主体に行われる行事である。六月は、川祭りの結果にあるように、改まりの年のための物忌み、禊祓が行なわれる月とあり、潔斎に関係ある民間の夏越しの行事を含めて、田植え終了後の、稲作に対する水の欠乏・虫の害・疫病等の防除のためおよび盆の霊祭を前にして、この時期にとくに禊祓、物忌み・潔斎の多大な必要性をうかがわせる。十二月の大祓同様に、川祭りの結果の十二月も、正月前の斎月と解せられるとあり、種籾の播種が前提となるだろう。年に二度、大きな祓禊があり、いかに農民が再生と更新を重視していたかがわかる。

(4) 死および霊魂に対する態度

「死者の霊魂は49あるいは100日間家から離れない」、「その間祝い事は一切しない」とし、死者の魂を忌むと同時に、別火を長くとり忌む火に犯されぬようにする。このように、農民は死霊に対し穢れ感・嫌悪感が何よりも強いように思われる。また、死霊の結果の、「烏の泣きが悪い」、「夜中に雨戸がガタンと大きな音を立てたりする」というのは、縁起かつぎといえるが、実際亡くなっている場合が多いという実情や、「生家へ魂が来た」、「死ぬ姿を見る」ということから、霊魂や亡霊とのつながりのあるあの世観を日常もっていることがうかがわれる。

その背後には、田の神への信仰に連がる、竈神への信仰のところで既述してきたように家に密着した祖霊観を日常もっているからだと思われる。死に対する恐怖、不安感だけでなく、潜在的な招魂思想があるから、魂がきたり、死ぬ姿をみてしまうのだろう。田の神との去来の構造より明らかにされた稲魂への物忌み期間や祓い思想と合致し、常に霊魂・死への祓いをしていないと生と死の連続性ゆえに不安感と恐怖感に脅かされるのだと思われる。以下の

産の忌みとの比較では、農民は死の忌みの方を重んじていることがわかる。

産の場所は嫁の実家の納屋・オクの部屋が使用されるが、別火に移すことよりも、むしろ食物の種類を制限し、陰の部・あの世を象徴する家の空間で忌み籠り、家族と共に祖霊を交えた一体感で、誕生してくる生命のためにこの忌みをのりきろうとしている様子がうかがわれる。産の忌は死の忌む期間ほど長くはないにしろ、神仏参詣を禁じていることより、産婦だけでなくその家族が穢れているとみなしている。

(Ⅱ)漁撈者の信仰

(1) 船霊信仰

(各地で儀式形態は種々あり、船も船大工が造る木造船の時代ではないが、儀礼・信仰の大筋は以下のようになる。)

(a) 造船儀礼

造船儀礼の船おろし前夜、船大工によって、密かに新造船の帆柱の台木に船霊様の御神体が入れられる。船に大漁旗幟を飾り餅を撒き、船大工は船主と共に船霊様に神酒と供物を祀る。

(b) 乗り初め儀式

船霊祀りは、正月二日または十一日の乗り初め儀式に行われる。乗組員一同、船霊様に注連飾りをし神酒やお供えして、大漁祈願と海上安全を拝む。

(c) 契約固め

船祝いの祝宴で、乗子・網子たちの契約固めや役割分担を決める場合が多い。例えば、西伊豆の田子や宇久須などでは、その一年間の船長・漁撈長・機関長等を選任し乗組員を確保した。船霊に供えた掛け魚・塩漬の魚を切り分け乗組員に分配し、船主と契約した。

（d）大漁祈願とマンナオシ

漁撈の開始前に常に拝むだけでなく、大漁祝いでも船霊様に捕獲した魚・御神酒等を供えて感謝し、乗組員全員で祝い酒を飲む。不漁が続くと、船霊様に御神酒を供え大漁を祈願しマンナオシを行う。不漁が続くと、棟梁に頼んで御神体を入れ替えてもらう。船霊には漁運のあるなしがあり、不漁が続くと取り替えることが多い。それ以外に船主が死んだり、あるいは水死体を船に積んだあとに、船霊様が取り替えられる場合が多い。漁運に恵まれる船霊は盗まれることもある。

（e）神威

船霊様は、災厄を予知し神鳴りをするといわれた。船霊様がおいさみになると、船上で鈴虫のリンリンと鳴くような音色、あるいは時計のチンチンと時を刻むような音がするといい、大漁か時化の前兆であるという。

（2）氏神様

（a）参詣と契約

船霊様と契約の項との類似がみられるが、いずれにしても、乗り初め儀式や船祝いを終え、そして氏神様参詣してから、船主や網元が催す祝宴で労働契約を結ぶ。

（b）大漁感謝

大漁であると、船は大漁旗を見せて岸に向かい、浜の人たちは浜小屋の前に大漁幟を立てて祝う。大漁祝いの大漁袢纏や手拭を網元が網子・乗子に配り、一同神社に捕獲魚を持参しお礼詣りをする。網元・船主が網子や親類縁者を集めて祝宴を催し、次の網の豊漁を祈願する。

（c）マンナオシ

不漁や天候の不順、潮行きの悪いとき、漁祈念・浜祈祷と称して神主中心の灘祭りの神事がとり行われ、部落全員浜辺において豊漁祈願しマンナオシの行事が行われた。恵比須様や船霊様にも祈願するが、

あて山に乗組員一同で参詣したり、遠方の社寺に代表が詣でる場合も多い。

(3) 竜宮・龍神様

竜宮様・龍王・海津見神社などと呼ばれる龍神は、各漁村に海の神として祀られていて、海上安全の神として深く信仰されている。一例をあげると志摩・度会・牟婁地方の岩礁性の海岸の港の入口にある岩は、いずれも海神・龍宮神の依代と考えられており、船の出入りの折り、「ツイヤ」などと唱え、潮をかけたり漁の帰りには魚や魚のヘソをそこへ投げる。

(4) 恵比須信仰

(a) 恵比須様

恵比須神は、船霊信仰と並んで漁民の篤い信仰を集めており、豊漁をもたらす神として、海辺に祠を建て村の祭祀対象になっており、船降ろし・網おろし・網あげの際は恵比須様に御神酒を供える。網組や船主が祀ったり、漁民各家の神棚に祀るものがある。また恵比須講では、赤飯を炊いて酒宴を張り大いに飲んで騒ぐ。

(b) 網霊様・エビスアバ

網霊(オオダマ)サマは網の神で、大漁続きの縁起の良い大浮子・エビスアバが網霊として祀られる。普段網を使用しないときは、神社の神殿のなかや網主の家の神棚か床の間に祀っておく。

(c) エビス神体

網にかかった霊石・人形(ひとがた)石にエビスさんが宿ると信じて祀ったり、また漂着した木等をエビス神体とした。漁運のいいエビスサンを盗んで祀ると漁運に恵まれるといい、盗まれた側は、漁に恵まれなくなるという。祀った当初は霊験あらたかで大漁に恵まれていても、不漁に見舞われだすとまた新たな御神体に替えて祀るという。

（d）神魚・クジラ・サメ

クジラやサメは回遊魚群を追いかける習性上、魚群を岸近くに招き寄せて漁をもたらすので、エビス様として崇敬されてきた。桜田(注3)によると、伊勢の伊雑宮で祀り神魚とされる七本鮫や出羽庄内のサケの王様とされる大助小助の例を挙げながら、クジラ・サメを神魚としてみなしていたとし、魚群を追って寄せ来る大魚をエビスとして崇めた漁民信仰の根底に横たわる神魚出現の例としてあげている。

（e）漂流死体・流れ仏

海に漂う死体・流れ仏を拾うことは縁起がよいとされており、水死体は丁寧に扱えば豊漁が約束されると解されることが多い。また、無縁仏となるかもしれぬ漂流死体が、祀ってもらいたいと船によくつきまとうという。

（5）御降臨および漂着神

（a）浜降り・磯遊び

神が降臨された浜に、臨時の祭壇を設けてお旅所を構え、神輿を渡御させ祭礼の日に浜降り行事を行う。神事前に浜で潮垢離をする。浜降りの朝、磯に出て潮水を汲み浜辺の小石を拾って帰り、海水は家の内外に撒き、小石は部落に納めるという。三月節句ころの御降臨された浜での磯遊びも同様の心意で行われる。

（b）貴神・木像

海岸の漂着物の中には木像の尊霊がみられ、それを祭神として祀るようになった。各地の地蔵・観音などの仏像が網にかかり、海中から出現したといわれることが多い。祭神がかつて海のむこうから流れ着いたり、御降臨された浜という縁起を伝承する浜の神社は多い。

注3：桜田勝徳、漁撈の伝統、民俗民芸双書25、p216-8、岩崎出版、1968

(6) 神々さま

(a) あて山

各漁場には山あての元山があり、また漁師の信仰対象の山となるので、網元・船主は乗子を連れて、籠って参詣する。マンナオシの際にも、乗組員一同で参詣した。また遠い地にある山の場合、船主自身が参詣できないと、誰かを代参させても崇拝する。

(b) 初漁・出船参詣

初漁や出船の際には、漁夫たちは井戸水で水垢離をとり、氏神様、恵比須様に参詣後乗船する。初漁を船頭が氏神さまに供え、また、恵比須社の最上段に二匹並べて供えたりする。沖では船霊さまに供えると共に浜に入るとき、崎々の神さまに魚の内蔵をを手向け、船元では祝宴を行う。

(c) 岬・津神社

津神社は、港か船溜りのあるところの小高い丘か、岬の突端に祀られている。出漁の際にこの聖地である岬の前を通る時は、鉢巻をとり大漁と海上安全を祈り、帰港時は魚のホシ・心臓かタチヒレを船中から供える。同時に船霊様へも取り舵から潮水を汲んでかける。

(d) 金毘羅様・住吉神社信仰

海の神・航海の安全を守る金毘羅様を漁民は大変篤く信仰している。その年の漁労の安全・海難救助と豊漁を金毘羅様に感謝する。住吉大社も漁民に広く信仰されている神社で神供漁場を支配しており、御神事毎に御供魚が奉納される。

(e) 魚供養

各漁村に魚供養碑が建立されており、供養の行事が行われた。漁業では殺生するので、そのための魚霊の鎮魂と豊漁祈願として、浦祈祷が行われる。

（f）御霊・疫病送り・祇園祭り

御霊を鎮め、疫病退散のために、六月から七月にかけて京都の八坂神社系の祓い主体の夏祭りを源とする祇園祭りが行われる。海辺や川辺で神輿をかついだり、海中や川中へ神輿を入れる行事と共に山鉾曳きがある。

（7）俗信

（a）産の忌

漁師は、産の不浄の穢れが移ることをとくに恐れ、出産の期間その夫は仕事を休み、妻は産小屋・他屋に籠る。産後三十日または七十五日間、煮炊きや寝泊まりし、忌み明けには潮・塩水で身を清める。お産は穢れたものとして海神が嫌うため、お産があった家の火で煮炊きしたものを食べた漁夫が漁に出ると不漁になったり、海難を招く恐れがあるという。

（b）死の忌

死の穢である不浄を漁師は嫌うが、産の忌みほどではない。死者の家の者をはじめ、その家の火で煮炊きしたものを食した人は、死の穢が伝らないように、別火にして忌み籠る。死の忌をほぼ一週間とし、その間の出漁は中止していた。不浄の身で出漁することは海神の霊を汚すことになるという。

（c）死霊・亡者

帆をかけて帰港しようとしたが、灯に向かうと船が流されてしまう、灯が亡者だと気がついてからは、何とか家に帰ることができたが、もし、灯に向かって船を進めていたら、亡者に引き込まれてしまった、という亡霊の話が多い。また、亡者は、船の人にヒシャクを貸せという、ヒシャクをそのまま貸すと、船に水を入れられ沈没させられるので、ヒシャクの底を抜いて貸してやるものだという。

考察

(1) 船霊様信仰に対する態度

乗り初めの儀式、契約固め、大漁祝いや不漁時という特定の儀式で船霊様を祀るだけでなく、漁撈前にも拝み、船霊様への帰依が多大であることがわかる。また、契約時に一年の忠誠を船主・船長と誓うが、船霊様に捧げた供物を分配しあうことにより、み霊分けをしたことになり、乗組員一同の結束はこの世的次元で結ばれたというより、むしろ神に対する契約であったともいえる。そこには絶対的な絆を一年間は保とうとする意志がみえる。

船霊様の御神体の祀った漁船で航海する漁師は、常に航海の安全や豊漁に恵まれるように祈っているせいだろう、船霊の神威により、大漁か時化であることがわかるのである。船霊様に信頼をよせ同化していたことと思われるが、その一方で不漁が続いたり、船主が死んだり、水死体を運んだ後は、既に入れてある船霊の威力の活性化や再生化をはかろうとはせずに、新しい船霊様に取り替えてしまうのである。

ここには、漁民の現実主義、合理主義的なパーソナリティが象徴されている。そして常にゼロからの出発といおうか、新規なものを追い求める生き方、潔さが如実にあるように思う。

(2) 氏神様、竜宮様、恵比須様信仰に対する態度

漁民は、既述したように、船霊様を随時拝み、大漁祈願・大漁感謝やマンナオシも祈願するが、氏神様にもほぼ同様に、大漁感謝やマンナオシを祈願する。しかし、とくに浜祈祷では、神主が灘を鎮める行事を行い、部落全員参加して祈祷するマンナオシゆえに、神主に全幅の信頼をよせていることが感じられ、両者の密着度が強い。

漁民は、竜宮様を海の神様とみており、その深い信仰心の背景には、常に航海の安全を念じてやまない、船底一枚地獄の危険性への多大なる不安感が

横たわっているからだろう。船行事にみられるのは、海の神様を常に若者が海中に入って慰撫したり、神輿の海上渡御をしたりし、船の出入りに「ツイヤ」と唱え潮をかけ魚のヘソを必ず投げたりし、常に海の神を神聖な気持ちで祀るのと同時に何か現世的な関わり方で慰めていることがわかる。

漁民の竜宮様への態度に比べ、漁を守り漁をもたらしてくれる恵比須さんに対しては、恵比須講での酒宴のように大いに飲んで騒いだり、エビスサンを各家にも祀り、庶民的で親しみやすいものと感じていることがわかる。エビス様は浜辺に祠を建立され、船おろし・綱おろし・綱あげや祭りの際の村の祠の祭祀の対象になり、初漁を最上段に供え豊漁を願い、常に漁民は恵比須様を豊漁を授ける神様とみなし、そこには漁民の授福的な性格がみられ、感謝の念を忘れない。

また、エビスという言葉は、鯨や鮫という豊漁をもたらす神魚に用いられたり、大漁を授ける漂流死体・流れ仏であったり、海から流れ寄る石や木片、あるいは漁網の浮標などに用いられ、漁をもたらす神様としての、エビスサンの多面的な面がうかがわれる。ここには、海の彼方から流れ寄る神の思想がみられるが、そこには聖なる神というよりも流れ仏に象徴されるように、異形の神霊がその神威を発揮でき授福神となっているようにも思える。エビス信仰にみられるように、漁民の多面性がうかがわれる。

(3) 神霊および種々の神さまに対する態度

浜降り神事では、神霊を迎えるにあたって必ず潮垢離を行う。また浜・磯で潮水を汲み小石を持ち帰り、家の内外も清めの儀式を行う。聖なる神霊を迎えるために、浜・磯辺、各家、そして神事に携わる村人の禊が行われ、村と人が一体となって、神霊を崇拝する様子がうかがわれるが、これはエビス神様に対する庶民的な扱いではなく、何にもまして聖なる存在であるという別格の扱いをしていることがよくわかる。

浜に流れ着いた木像の尊霊や各地の地蔵・観音の祭神や、御降臨された浜と縁起を伝承する神社の神霊にしても、海底からなのか飛翔して海を渡って

きたのか、いずれにしても訪れ神に対する畏敬の念と期待で、村人が祠や神社に安置している様子がうかがわれる。

漁村統合の中心には氏神さまを祀る。既述してきたように、漁業と関係の深い神様である、恵比須さま、龍宮さま、船霊さまをとくに漁民は崇拝し、定期の祭礼行事以外にも、初漁を供えたり、大漁祝いで祀ったり、神酒や供物を供えに、氏神さまだけでなくそれらの神さまを頻繁に参詣をし交流を図るが、それ以外にも金毘羅さま、住吉神社、またあて山を信仰し航海安全と豊漁を祈願し、また感謝の念を忘れない。聖地である岬に建立されている津神社の前を通る時は、船中から敬意を表し魚のホシ・心臓を捧げているが、魚の霊魂を鎮めているともとれる。航海安全や豊漁祈願と感謝を捧げ、海と関係があると漁民が考えている神さまに対しては、惜しみなく敬虔な信仰心を示している。

また、生きとし生けるものを殺生して生活が成立している漁師にとり、魚霊を供養することは捕獲しながらも、生き物に対しての慈しむ心が強いことが感じられる。漂流死体に出会う漁師は、その身寄りのない死体を丁寧に葬り祀ったが、とくに御霊鎮めはそれら身元不明の御霊が出没せぬよう、疫病退散も含め、祇園祭の祓いの行事で必要だったことだろう。死霊・亡者の結果にあるように、漁民は霊魂の引き込み現象に遭遇しやすく、海での航海という状況上命を落とすことにもなりかねない。霊が浮遊したままにならないようにと、念ずる気持ちは強かったことだろう。

(4) 死および霊魂に対する態度

漁業者は、死を忌むよりも産を忌み嫌う。特に産を忌むことが強いのはその忌む期間の長さからもわかる。その不浄の穢れが夫の漁師に移ることを嫌い、妻は一月以上産小屋で別火生活をとり、夫は一週間漁を休んで忌む。この背景には、何よりも、海難を恐れ、竜宮様・海の神や船霊様・船の神の嫌うことを避けたいという気持ちが強いことがあらわれている。漁業者は、産を忌むので長い別火生活を、農耕者のそれと比べてみても、重視していたこ

とがわかる。

産婦がこのように長い別火生活に入り、忌み籠りをするのは、夫・他人と絶縁状態を保つ必要があるほど、身体が穢れており、その穢れを他者に煮炊きを通して移さないという考え方がある。常に神聖な魂・海の神、船の神が前提にあり、海難と不漁という死活問題を避けたいという意向が強いからだろう。禁忌を厳守し穢れを除き、清浄の維持に努めている漁村での、浄化観念は強い。

漁村の場合、死の穢れについてはさほど厳格な禁忌は伴っていないのは、流れ仏とする漂流死体をエビスサンとみなすことからも明らかなように、漁をする船に乗せて寄港してくるほどであり、死体というものに対し抵抗感がない。ただ、死霊の件にあるように、亡霊の引き込み現象に負けてしまうと命をおとしかねないところがあるが、亡霊と生者との間には対話や間があり、引き込まれなければ助かるという前提もみられるように思う。しかし海での生業は危険を伴い、魚という生き物を殺して食することも日常化する中にあり、常時種々の神様を祭祀し、頻繁に参詣する、また潮水・海水の浄化作用が自ずと働いているためもあり、死への穢れ観念が薄いのだろう。

まとめ

(Ⅰ)農民のパーソナリティ

稲魂を次の苗・稲魂につなげていくという、土地という定着の文化における積み重ねの思考を背景に強い継承観がみられる。田の神と山の神の重複や田の神の去来型より明らかなのは、多重構造的な気質や連続志向性である。種籾の長い期間の忌み籠りを通して、再生化への重複がみられる。稲の成長および稲魂の誕生を前提に、禊祓、物忌み・潔斎への価値観を大切にし、とくに再生と更新を重視する。

客人神と疫病神への対応の仕方より、祝福的および除災的な両面の性格が顕著にみられる。日々の垢・穢れを落とすのに、精進潔斎での祓いに重きをおいている。苗を供え稲の成長の守護を、家のあの世との媒介する神に求めており、祖霊への神頼み的信仰が強い。

農民の場合、死に対し穢れ感が何よりも強い。常に、霊魂・死への祓いをしていないと、生と死への連続性ゆえに不安感と恐怖感に脅かされるのであろう。農民は産の忌みとの比較においては、漁民と異なり、死の忌みの方を重んじている。また、日常的に潜在的な招魂思想がみられるのは、祖霊信仰を機軸に、祖先の魂の輪廻の思想が根底にあるからだろう。

(Ⅱ)漁民のパーソナリティ

船霊様等に対する信仰、そして魚撈という流動的な文化を背景に、漁民の現実主義、合理的主義的な性格がみられる。常にゼロからの出発を恐れず、新規なものを追い求める生き方、潔さが如実にあらわれている。

氏神様への絶対的な帰依、また神々への多大な密着度がうかがわれる。竜宮および恵比須信仰の在り方には、海の彼方から流れ寄る神の思想がみられ、聖なるもの俗なるもの、二律相反するものを受容する寛大さがみられる。また授福的な志向で常に霊力に感謝の念を忘れない。恵比須として祀る神さまの在り方に見られるように、漁民の多面的な気質がうかがわれる。

海と関係があり、海上の安全および漁をもたらす神さまに対しては、惜しみなく敬虔な信仰心を示している。また、漂流死体を拾うのには、漁をもたらすエビスだからという現世利益的志向がみられるが、生死を左右すると考えている船幽霊に襲われないように、霊魂を浮遊させないようにと、魂の存在を前提に魂鎮めを重んじている。また、魚霊信仰にみられるように、生きとし生けるものを大事にするというアニミズム信仰が根強い。

漁民の場合、死への穢れ感は、産への忌みほど嫌わない。その背景には、漁民は浄化志向が強く、穢れを潮水・海水のもつ霊力で洗い流し、禊ができ

るからだろう。

参考文献

石井丑之助、日本船だま考、車偶庵文庫、1980
桜井徳太郎編、民俗信仰辞典、東京堂出版、1987
桜田勝徳、漁撈の伝統、民俗民芸双書25、p216-8、岩崎出版、1968
文化庁、日本民俗地図Ⅰ（年中行事１）、1969
文化庁、日本民俗地図Ⅱ（年中行事２）、1971
山田・矢島他、北海道の生業２、漁業・職域、明玄書房、1981、p30-143
三浦・小林他、東北の生業２、漁業・職域、明玄書房、1981、p39-335
阪本・柏村他、関東の生業２、漁業・職域、明玄書房、1981、p151-194
川上・井塚他、北中部の生業２、漁業・職域、明玄書房、1981、p37-271
津田・橋本他、南中部の生業２、漁業・職域、明玄書房、1981、p141-303
條・高橋他、四国の生業２、漁業・職域、明玄書房、1981、p36-191
楠本・平田他、九州の生業２、漁業・職域、明玄書房、1981、p37-291
名嘉真・出村他、沖縄・奄美の生業２、漁業・職域、明玄書房、1981、p19-187

A Study of Consciousness in Farming and Fishing Villagers:Their Religious Faith through Festivals of Gods
(English Résumé)

Sumiko Hattori

This study of culture and personality is aimed at investigating the distinguishing personality characteristics of farming villagers and fishing villagers by adopting the method of example in regard to their regular religious festivals. Religious rites were chosen because they are considered to be the reflection of each of these groups belief in souls and to shed light on their basic individual consciousness.

Characteristics of farmers' faith in gods and their personality are shown as follows.

Each stage of the interaction between the god of rice fields and farmers shows their personality as multiplex. They place the highest value on the idea of regeneration. The ideas of inheritance/succession and repetition are highly regarded and cherished.

Having a strong tendency to detest uncleaness/ "kegare" , and above all death "kegare" , they consider the performance of ritual exorcism extremely important.

The farmers communicate with the spirits or souls of their departed ancestors and their continual dependence on their protection is paralleled by their strong attachment toward each family ancestor.

Characteristics of fishermen' s faith and their personality are shown as

follows.

The interaction between fishermen and the guardians of their ships or beliefs in their gods suggests the rationale they appply to life and a new beginning which will be an improvement on what was lost previously.

The many-sided dedication toward gods, especially the god-Ebisu, including the dead body, indicates their multilateral and versatile characters. Their belief in gods instills within them a broad-mindedness in regard to receiving both holiness and natural vulgarity which are dualistic qualities imparted from the sea.

Their frequent wish for divine protection during their many voyages and the abundant blessings and offerings of thanks which they bestow upon their various gods such as the god-Ujigami, the god-Ryujin, the god-Ebisu, and so, for granting them the luck of big catches, testifies to their enthusiasm for their beliefs and their devout piety.

They cherish the idea of the mysterious oceanic power to purify. Their attitude toward death is indicative of how they considered it as less unclean than farmers do. Fishermen regard the 'kegare' of childbirth as more impure and require a strict observance of the abstinence and segregation from everyday life.